農業高校における就職指導の在り方の研究

～実態調査の考察を通して考える農業教育の有効性～

高知県立高知農業高等学校　　教　諭　渡邉　耕司

学習指導要領の「生きる力」の育成、「キャリア教育」の推進等は、農業高校の教育活動そのものであると思われる。しかし、近年農業高校でも進路未定者や早期離職率の増加が進路指導の問題となってきた。そこで本研究では、農業教育の有効性を生かした進路指導の研究に取り組んだ。高校教育での進路指導上の問題と生徒の進路意識、また社会の望む高校生像についての実態調査を実施した。そして体験学習を中心とした農業教育の有効性を生徒が自覚するよう「実習日誌」及び「チェックシート」を作成し検証を行った。以上のことから、農業高校での体験学習の有効性を生かして、生徒自身の自己理解と教員の生徒理解を深め、生徒の進路を拓く就職指導の在り方を考察した。

キーワード：進路指導、農業教育、体験学習、自己理解、生徒理解

1　はじめに

(1)　農業高校の変遷

後継者育成や学科関連技術者の育成を中心としたかつての「職業高校」の教育においては、卒業生は後継者あるいは社会の即戦力として期待されていた。高校３年間で学んだ専門知識や技術、そして「生きる力」を備えた人間性がそのまま社会で通用するものであったと思われる。しかし、農業高校や工業高校等の現在の専門高校では、時代に対応すべく教育課程に新たな教科・科目を導入し、普通教育の割合を増やしながら、「職業高校」→「実業高校」→「専門高校」へと教育内容を変えて今日に至っている。専門性を高めるためには上級学校への進学が必要となり、即戦力を求める事業所の雇用も高校新規卒業生から大学新規卒業生へとシフトし、高校卒業生の専門的な職域も狭められてきた。さらに、農業高校への入学者は、国際化や産業構造の変化から農家出身者は減少の一途をたどり、生徒が多様化するとともに、その進路希望も多様化してきている。

このような流れの中で農業高校の方向性は後継者及び関連技術者育成を中心とした「農業を教える」教育から、専門性と特性を生かした「農業で教える」豊かな人間づくり教育へと変わりつつある。

(2)　高校生の進路

社会情勢の変化、経済環境の変化とともに高校生の進路状況も大きく変化している。高学歴社会を反映した大学進学競争の時代から、豊かな社会・雇用形態の変化によるフリーターの増加した時代、勤労意欲の欠如したニート増加時代と変わってきたように思われる。そして現在は経済環境の急激な悪化が進む時代となり、就職難に拍車をかけている。このような激しい社会変化の中で、高等学校での進路指導は出口保障としての進学・就職先決定指導に偏重され、生徒自身の目的意識や自己理解力の育成、社会での適応能力（社会人基礎力）の育成が十分になされていなかったのではないだろうか。その結果、自身の適性を知り主体的に将来を選択決定する力の不足から進路未定者や早期離職者の割合が増加傾向にあり、進路指導の課題となってきた。

(3)　農業教育の特性

進路指導を考える場合、生徒自身が自己理解を深め、主体的に進路選択ができると同時に、将来社会の一員として望ましい人生を歩むために必要な力の基礎を付けることが必要である。自己理解は他者を通して自分を客観的に見て得られることが多く、コミュニケーション能力や他者理解等の人間関係形成能力が必要である。また、自己理解は実体験での気付きを通して深まる。農業教育の

特性として、「総合実習」等の集団での体験を通した学習が中心であり、人間関係形成能力や自己理解には大変有効であると同時に、社会人基礎力の育成にも有効であると考える。また、体験学習は教員と生徒が体験を共有する学習形態から座学では気付くことのできない生徒の発見があり、教員側からは生徒理解にも有効な学習形態であると考える。

2　研究目的

高校３年間を社会に出る準備段階ととらえ進路指導を進めるにあたっては、生徒自身の自己理解と社会人基礎力の育成、そして教員の生徒理解と指導にあたっての力量が必要である。前述のことから、高校生の就職・進学を取り巻く進路環境は大きく変化しており、農業高校としての方向性や役割は変わりつつあるが、農業高校での教育効果は学習指導要領の「生きる力」の育成や「キャリア教育」の推進につながるものであると考える。そこで次の研究仮説を立て研究を進めた。

実態調査から高校教育での進路指導上の問題と生徒像について考察するとともに、農業教育の専門性を生かした教育効果を分析することにより、生徒自身が自己理解を深め、将来の進路を考える力をはぐくむ就職指導の在り方を見いだすことができるであろう。

3　研究内容

(1)　基礎研究

ア　高等学校における進路指導の現状と課題

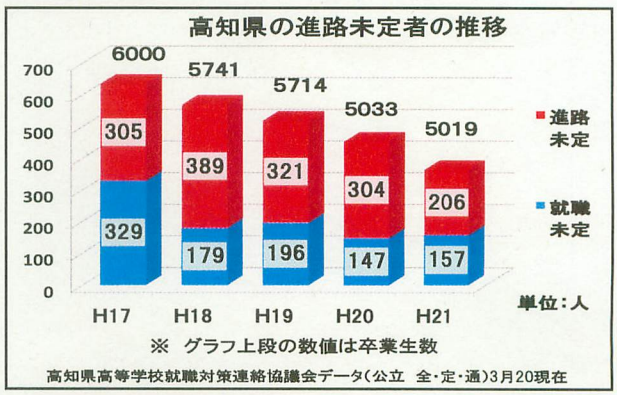
近年の高校生の進路状況は、産業構造や社会情勢の変化に伴い多様化してきている。しかし、高等学校における進路指導は、出口保障に重きがおかれ、特に就職に関しては、３年生の７月以降つまり求人票を見てからの短期間での指導であったように思われる。そのため生徒においても自己理解不足から、自らの適性を見いだせない者や主体的に進路を決められない者が多く見られるようになってきたと思われる。

その結果、進路未定者の増加や早期離職につながっていると考えられ、進路指導においては生徒の自己理解と教員の生徒理解をいかに深めていくかが課題となってきている。そして指導する教員の進路指導における問題点や方向性の共通理解が重要であると考える。

イ　高知県の進路未定者数の推移

高校卒業時に進学も就職もしない進路未定者の増加や早期離職者の増加は、大きな社会問題にもなり進路指導上の課題である。

産業構造や景気による雇用状況によっても大きく左右されているが、高知県においても例外ではなく、進路未定のまま卒業する生徒は毎年存在する。高知県高等学校就職対策連絡協議会のデータから過去を調査してみると、図１のような結果が出てきた。



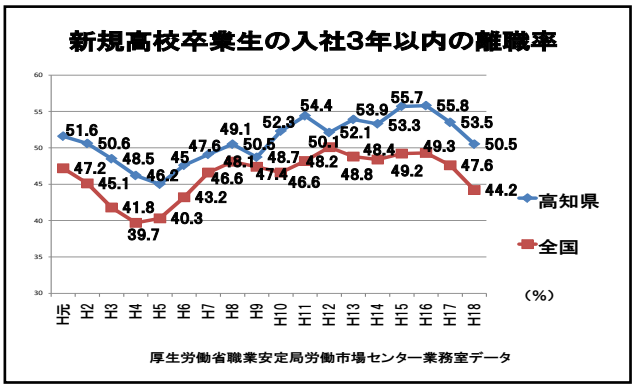
【図１】高知県の公立高校進路未定者の推移

図１は就職も進学も希望せずに卒業した進路未定者及び、就職を希望しながら内定まで至らなかった生徒の数である。（進学未定者については、このデータ集計時期には明確な数値が出ていないので省略している。）グラフからは右下がりに数値が小さくなっているように思われるが、卒業生総数（グラフ上段の数値）から見ると毎年５～６％の進路未定者及び就職未定者数で推移しており、割合から見る変化は少ない。卒業時に進路が決まらない生徒がこれだけいることを、指導する我々教員は真摯に受け止め対応を考えていかなければならない。

ウ　高知県の新規高校卒業生の離職率

図２は厚生労働省職業安定局の「新規高校卒業生の入社３年以内の離職率」のデータである。

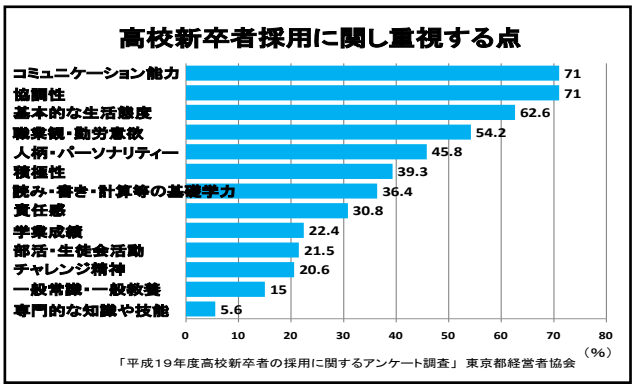
高知県の離職率は全国平均を大きく上回っている。高知県の産業基盤や雇用状況も一要因であろうが、離職理由としては、先行研究のデータでは「仕事への適性」や「職場の人間関係」が上位を占めている。単にミスマッチと片付けるのではなく、その背景を把握し対応していく必要があると思われる。



【図２】新規高校卒業生の入社３年以内の離職率

エ　高校生に求められる力とは

社会は高校生にどのような印象を持ち、何を求めているのだろうか。図３は東京都経営者協会が実施した、「平成 19 年度高校新卒者の採用に関するアンケート調査」である。結果から「人間性」、「社会性」を重視していることが分かる。事業所への聞き取り調査からも同様の意見が聞かれた。このことから高等学校の現場では、高校３年間を社会に出る準備段階ととらえ、一人の人間として社会を生きていくための力を付けていくことが必要になってきたといえる。



【図３】高校新卒者採用に関し重視する点

(2)　実態調査

ア　事業所に対する高校新卒者の採用に関するアンケート

高校生を採用している事業所約 1700 社に対してアンケートを実施した。回収率は約 14%（230 社）、質問項目は現在の高校新卒者に対する印象や離職率、学校及び家庭に求める役割等である。

主な集計結果は図４のとおりである。

（ァ）　離職について

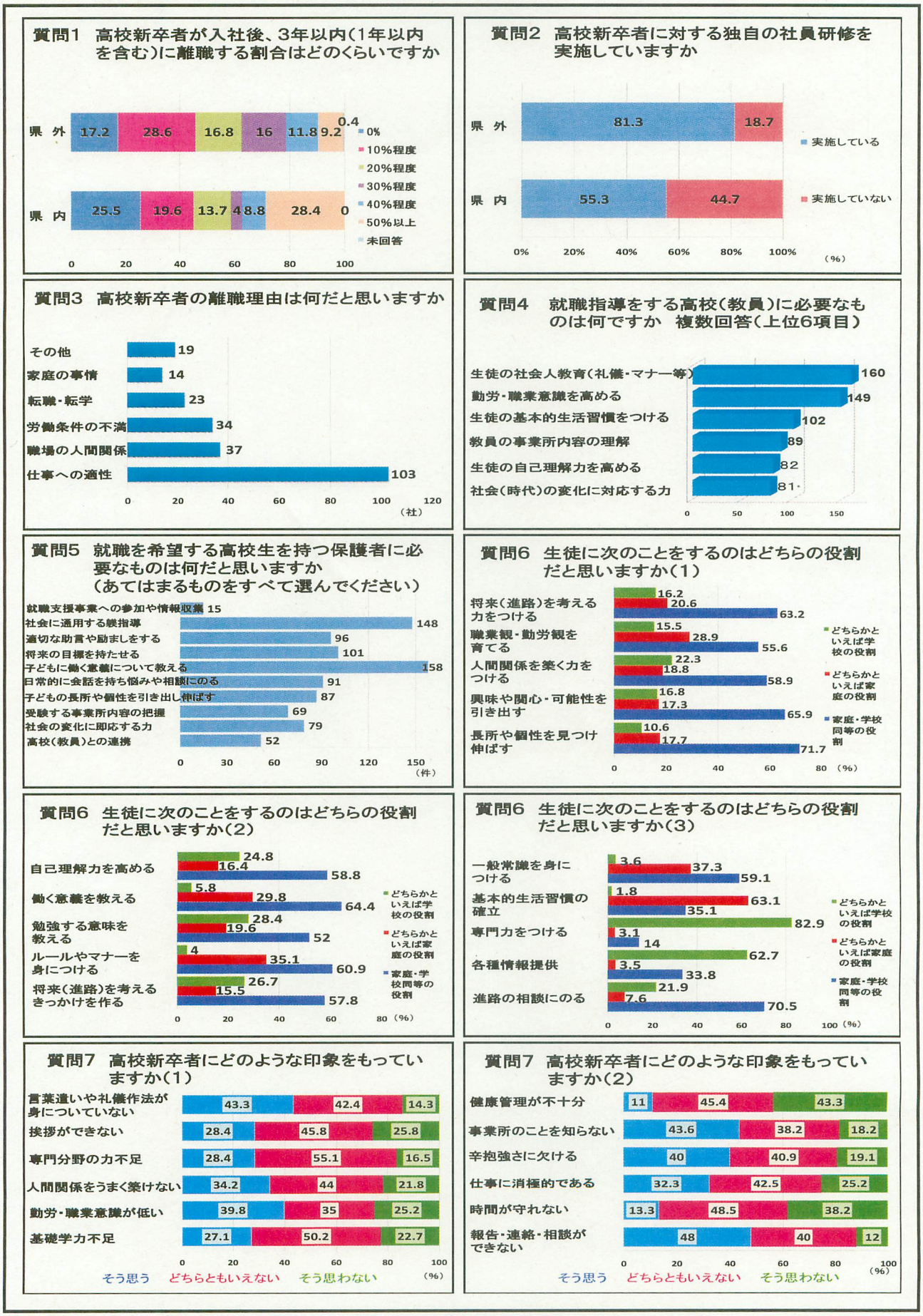
質問１は離職についてであるが、50%以上の離職率が県外事業所より県内事業所で高いことが分かる。質問２の社員研修の実施率についても県内と県外で大きな開きが見られ、その結果が上の図２の状況に表れているように思われる。主な離職理由は質問３のとおりで、仕事内容の理解不足や対人関係を築けていない実態がうかがえる。

（ィ）　学校（教員）及び家庭（保護者）の役割

質問４・５・６は高校生の就職指導に対して、学校（教員）や家庭（保護者）に求めることについて調査したものである。

学校に対しては、「生徒の社会人教育」・「勤労・職業意識を高める」等が上位にあるが、「教員の事業所内容の理解」も多くの事業所が望んでいる。大学生等と比較して高校生が事業所を知る情報は大変少ない。多くの生徒が求人票と教員からの情報を基に事業所を決定しているのが現状である。最近では求人情報誌やホームページ等の利用もあるが、情報提供の中心はやはり教員である。表面的な情報提供でなく、十分な事業所理解が必要である。そのためには積極的な事業所訪問や卒業生からの情報収集が必要であり、連携を検討する必要がある。また、その情報を個人的なものでなく学校全体で共有し、広くは学校間で共有する仕組みが必要であると思われる。

保護者に対しては、社会性を身に付ける指導を求めていることがうかがえる。先行研究や本研究の調査からも事業所は、生徒の持つ学力と同時に人間性や社会性を重視している。社会性育成のためにも保護者や地域との連携した指導がますます必要となってくるだろう。



【図４】事業所に対する高校新卒者の採用に関するアンケート

（ｳ）　高校新卒者の印象について

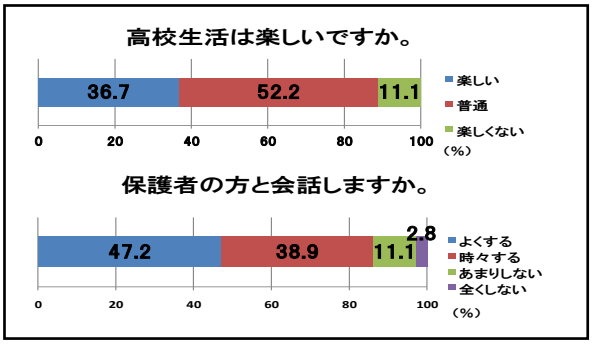
質問７は高校新卒者に対する印象を集計したものである。図３の「高校新卒者の採用に関し重視する点」に見られたように社会性や人間性に対する項目で厳しい評価が見られる。このことから学校現場では、基礎学力や専門的知識・技術の指導と同時に、社会への移行がスムーズに行えるよう社会人基礎力の育成が必要であろう。

イ　高校生に対する進路意識調査

高知県内のＡ農業高校２年生（６学科･193名）を対象とした進路意識調査を平成 21 年 11 月に実施した。

（ｱ）　高校生活と家庭について

図５は学校生活及び保護者との会話についてである。学校生活については、学科による違いはなく､88.9%の生徒が｢楽しい｣･｢普通｣と答えている。しかし各学科一割「楽しくない」生徒が存在するこれらの生徒は家庭での保護者との会話も少なく、将来の進路に対する考えも浅いことが分かった。進路に関しては、学校生活での経験や人間関係の形成が大切であり、この生徒たちに学校生活及び進路意識を高める手立てが必要である。

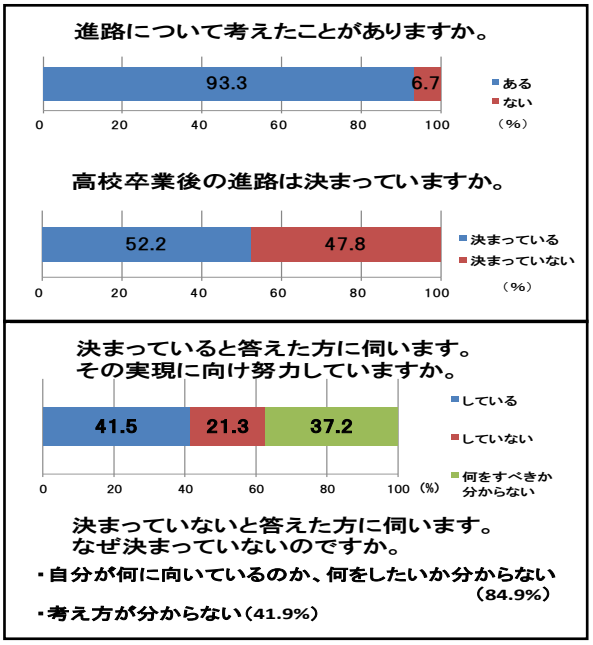


【図５】学校生活及び保護者との会話

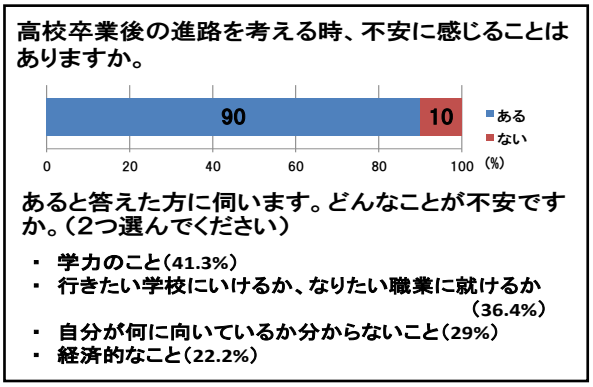
（ｲ）　進路について

図６から、進路について考えている生徒は 93.3%、しかし高校卒業時の進路希望が決まっている生徒は 52.2%。また進路の実現に向け努力している生徒は 41.5%であった。進路が決まっていない生徒の理由は、複数回答であるが「自分が何に向いているか、何をしたらいいのか分からない」生徒が 84.9%、「考え方が分からない」生徒が 41.9%と多い。

また「進路を考える時に不安を感じる」生徒は 90%で、その主な理由として「学力のこと」･「希望進路が達成できるか」･「自分が何に向いているか分からない」が挙げられている。２年生の 11 月中旬に、自分の適性や方向性を主体的に見出せない生徒が多くいる現実に対して私たち教員、そして保護者も真剣に対応を考えなければならない。



【図６】進路について



【図７】進路に対する不安

（ｳ）　高校の進路指導について

高校の進路指導としては、図８の結果が得られた。十分な進路指導と感じていない生徒が 36.7%は存在し、高校に望む進路指導からも情報の少なさに対する不安がうかがえる。また家庭に対して望むことは、図９のとおりである。この結果から、学校だけでなく家庭において

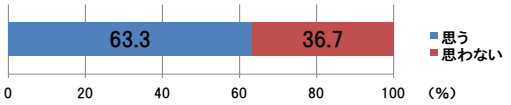
も、生徒自身が自分を見つめ、将来を考えるきっかけの場面や働くという現実問題を受け止め理解する場面を多く提供していく必要性を感じる。

（ェ）　新規高校卒業生に必要な力について

図 10 は「高校生活を通してどのようなことが進路選択や社会に出た時に役立つと思うか」を尋ねたものである。この回答から生徒たちは、自身にとって、役立つ力は体験したことから学ぶことが多いと感じていることがうかがわれる。

また、「高校生活を通して身に付けたい力」や「総合実習を通してどんな力が育成されると思うか」の問いに対しては、図 11、図 12 の回答が得られた。これらの力は事業所が採用に関して重視する内容とほぼ同様である。生徒たちは社会が求める力を身に付けたいと考え、その力の多くが体験を通してはぐくまれることに気付いているようである。また、「総合実習を通してはぐくまれる力」に対しての回答は、１年生での総合実習アンケートでも質問しているが、２年生は回答した内容が１年生より随分と多かった。このことは１年間の成長の証であり、体験学習の有効性と見ることができよう。しかし、はぐくまれている力を生かして自分の潜在能力を引き出し、進路の選択・決定にまで生かせていない生徒が多い現状が調査から感じられる。

現在、高校での進路指導は十分だと思いますか。



高校ではどのような進路指導を望みますか。

- 各学校や各事業所（会社）の情報提供（47.8%）
- 生徒の興味・関心や可能性を引き出す指導（32.2%）
- インターンシップ等校外での体験学習を増やす（29.4%）
- 各学校や事業所の見学会を実施して欲しい（28.9%）
- 卒業生など身近な人の経験を聞く機会（27.8%）
- 進学・就職のための補習授業を充実して欲しい（21.1%）

【図８】高校の進路指導

進路を考えるうえで家庭（保護者）に望むことは何ですか。

- 自分のやりたいことをやらせて欲しい（43.3%）
- 仕事の大切さや厳しさを教えて欲しい（29.4%）
- 将来の考え方を教えて欲しい（23.3%）
- やる気になるような言葉をかけて欲しい（18.9%）
- 自分の良いところを引き出して欲しい（15.6%）
- もっと真剣に考えて欲しい（12.8%）
- 働くことの意義を教えて欲しい（11.7%）
- 保護者の体験談を聞かせて欲しい（8.3%）

【図９】家庭（保護者）に望むこと

高校生活を通してどのようなことが進路選択や社会に出た時に役立つと思いますか。

1位：総合実習（53.9%）
2位：専門教科の授業内容（46.1%）
3位：部活動（45%）
4位：高農3訓（39.4%）　気持ちの良い挨拶　時間を守る　整理整頓
5位：学校行事（35%）
6位：校則（34.4%）
7位：現場実習や現場見学（33.3%）
8位：友人関係（32.8%）
9位：普通教科の授業内容（29.4%）

【図 10】高校生活を通して役立つこと

高校生活を通してあなたはどのような力を付けたいと思っていますか。

◎ コミュニケーション能力
◎ 学力
◎ 積極性・チャレンジ精神
◎ 一般常識
◎ 責任感
◎ 基本的な生活態度
◎ 自立心
◎ 社会性
◎ 専門的知識・技術
◎ 将来役立つ力
◎ リーダーシップ

【図 11】身に付けたい力

総合実習などの体験学習を通してどのような力が身に付くと思いますか。（記述式）

◎ 忍耐力
◎ 専門力
◎ 勤労観
◎ 協調性
◎ 積極性
◎ コミュニケーション能力
◎ 責任感
◎ 判断力
◎ 将来を考える力
◎ 分からない
◎ 達成感
◎ 感謝する心
◎ 命の大切さ
◎ 思いやり
◎ 優しさ
◎ 集中力
◎ 団結力
◎ 仕事の厳しさ
◎ 人間関係

【図 12】実習で育成される力

ウ　自己理解を深める取り組み　－総合実習日誌・チェックシートの活用－

農業高校の総合実習は体験学習を通して専門性を学ぶものであるが、次のような特性がある。

「生き物（動物・植物）を相手とする」・「生命を知る」・「自然を相手とする」・「校外での実習や地域との交流がある」・「危険を伴う場合がある」等である。

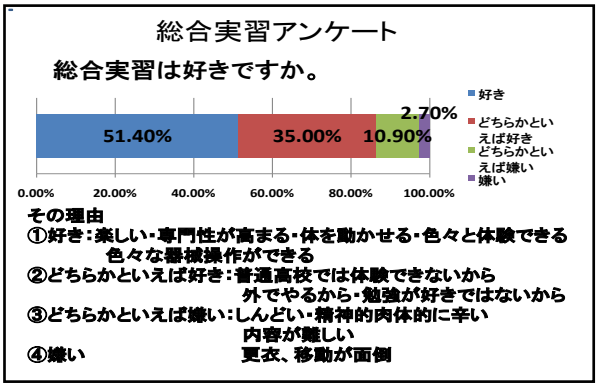
このような特性をもつ集団での体験学習を通して、自分を振り返り自己理解と他者理解を深め

進路意識を高揚させる方法として、総合実習日誌とチェックシートを作成し、A農業高校１年生（６学科・195 名）を対象に 11 月上旬から 12 月上旬にかけての１か月間使用させた。また総合実習日誌及びチェックシートの使用前後には、総合実習アンケートも実施し、農業教育の有効性についての検証を行った。

「総合実習日誌」は、実習の内容や目的、専門的知識・技術の習得を中心とした内容で構成した。「チェックシート」は、実習に取り組む姿勢、他の生徒との関わり方、判断力や行動力、教員との連携等 15 の項目で構成し、実習終了後に生徒が振り返りから自身を見つめること、そして教員が目を通すことで生徒理解を深めることを目的として作成した。

（ァ）　総合実習に対する印象

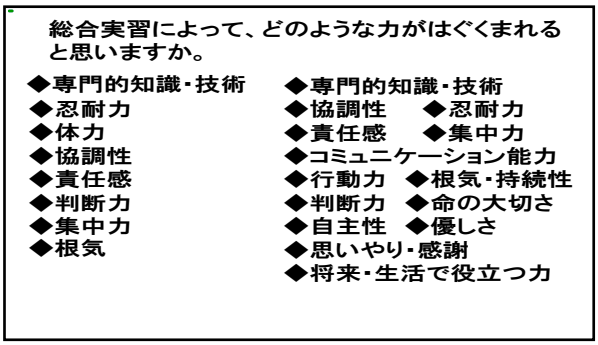
アンケートの集計によると、図 13 に見られるように総合実習を「好き」・「どちらかといえば好き」と答えた生徒は 86％で、その理由として、「楽しい」・「体を動かせる」・「色々な体験ができる」等の回答が得られた。多くの生徒が「好き」という学習形態であるということ、調査校では３年間で 12 単位を履修させていることから、総合実習を活用すれば自己理解や他者理解を深め社会人基礎力を育成させながら進路意識の高揚につなげる効果があると思われる。



【図 13】総合実習に対する印象

（ィ）　総合実習ではぐくまれる力

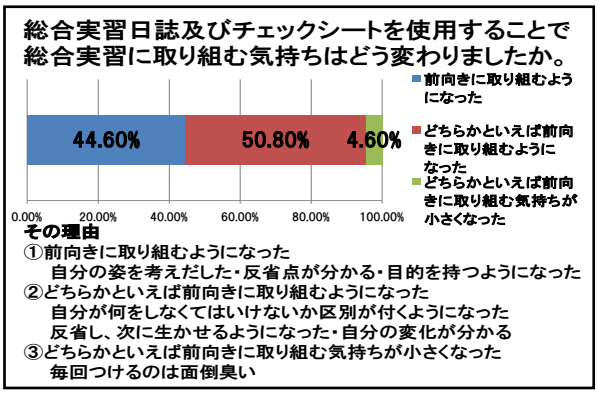
「総合実習を通してどの様な力がはぐくまれると思うか」の問いには、図 14 の回答が得られた。左が総合実習日誌及びチェックシート使用前、右が使用後である。これは総合実習日誌やチェックシートを付けることで振り返り、自覚を深めている結果のあらわれと考えられる。



【図 14】総合実習ではぐくまれる力

（ゥ）　総合実習日誌及びチェックシートについて

総合実習日誌及びチェックシートの使用によって取り組む気持ちが変わった生徒は 39.5％で、その生徒たちには図 13 に見られるような変化があった。また、「総合実習日誌はつけた方が良い」と答えた生徒は 56％で、「実習内容の確認・復習ができる」・「目的を持って取り組むようになった」・「反省して次に生かせる」・「レポートを書く力になる」等の意見が得られた。「チェックシートはつけた方が良い」は 51％で、その理由は「自分を振り返ることができる」・「自分の姿が見え、記入にも時間がかからない」・「自分の変化が分かる」等の意見が得られた。



【図 15】総合実習に取り組む気持ち

今回は約１か月と短期間での使用であるが、生徒の意識変化が見られ、総合実習日誌及びチェックシート使用の目的に対する効果を確認することができた。

以上のことから、総合実習日誌をつけることは実習内容を確認でき復習・予習の効果が見

られ、専門性を高めることが期待できると考える。またチェックシートについては、自己理解や他者理解を深め、社会性の育成にも有効であると思われる。担当教員からは、「生徒の実習に取り組む姿勢や性格、他の生徒との関わり等を見ることができる。」、「継続的の使用によって、生徒の適性や人間性の変化・成長を見ることができる。」等の声が聞かれ、生徒理解にも有効であると考える。継続使用することで更に気付きと自覚を深めることが期待できると思われる。

4　まとめ（成果と課題）

本研究では、高校生の就職環境を取り巻く現状の確認、また、農業高校生の進路意識に対する実態を確認することができた。本研究を通して、農業高校では様々な力が体験を通してはぐくまれ、その力を社会が求めていることに生徒たちは気付いているようである。しかし身に付けた力を発揮する機会が少ないためか、自覚が乏しく自らの興味・関心を引き出し進路選択・決定へとつなげていく力までには高められていなことが分かった。

集団での体験学習は他者との関わりを通して、人間関係形成能力の育成にも有効である。個々の生徒と関わる時間が減少している今日の学校現場において、教員と生徒が体験を共有する学習形態は生徒理解にも有効であると思われる。また、生徒自身が振り返りと自覚を深めることにより、自己理解の深化と自信となり、適性を知り、可能性を引き出すことにもつながると思われ、今回作成した「総合実習日誌」及び「チェックシート」はその効果が見られた。今後は世代の異なる多くの人々との関わりや地域社会での体験等、生徒たちがはぐくんできた力を発揮して活躍できる多くの場面を提供することを進路指導部の取組として考えたい。そのような指導計画を整備することで、生徒の視野を広げ社会性や人間関係の形成を更に高めることができると思われる。

課題は大きく二つある。一つ目は、本研究を通して生きる力をはぐくむためには体験学習が有効であることが分かったが、この有効性を専門高校だけの特性とせず、いかに普通高校へと広げていくかということである。今後、地域社会との連携や専門高校と普通高校との連携による体験学習の活用法を研究し、生徒の進路指導に生かしていきたい。

二つ目は、生徒の自己理解を深め社会性や人間性を高めることの目標をどのレベルに設定するかということである。今回作成した「総合実習日誌」や「チェックシート」を活用し改善を加え、結果を学校全体で共有し、教員の共通理解を深めながら考えていきたい。

【主な引用・参考文献】

・(財) 日本進路指導協会「中学校・高等学校における進路指導に関する総合的実態調査報告」　2006
・高知県経営者協会「高校生の就職に関するアンケート」　2005
・高知県経営者協会「高校生採用に関する企業意識調査報告書」　2009
・小林忠嗣『人格教育への挑戦』　キングベアー出版、2008
・山崎保寿『キャリア教育が高校を変える』　学事出版、2006
・香山リカ『就職がこわい』　講談社、2004
・小島貴子『働く意味』　幻冬舎新書、2007
・城繁幸『若者はなぜ３年で辞めるのか？－年功序列が奪う日本の未来－』　光文出版、2006
・小杉礼子『フリーターとニート』　　勁草書房、 2005
・(財) 産業教育振興中央会「産業と教育－産業教育 120 年記念特集」　2004
・文部科学省「キャリア教育推進の手引き－児童生徒一人ひとりの勤労観、職業観を育てるために－」　2006
・経済産業省「社会人基礎力に関する研究－中間とりまとめ－」　2006
・吉田辰雄『キャリア教育論　進路指導からキャリア教育』　文憲法堂、2005
・『キャリアガイダンス』　ＲＥＣＲＵＩＴ、各号　　・『月刊高校教育』 学事出版、各号